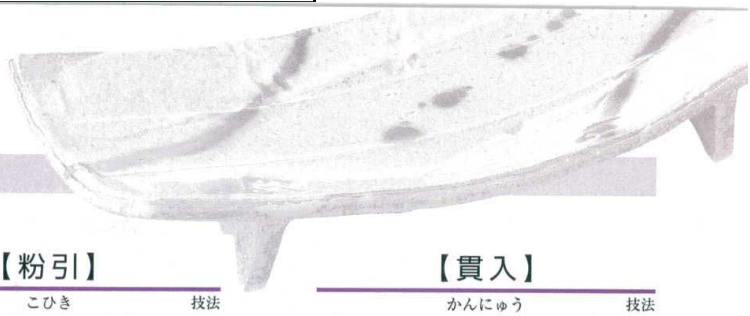
JAPANESE TABLEWARE

Catalogue No.
20151-3



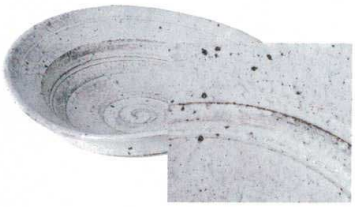
【焼締】

やきしめ　無釉

成形した陶器を、釉薬を掛けずに1300度前後の高温で硬く焼き締めた焼物のことです。表面が無釉の為、ざらっとした土の感触と独特の風合いが魅力です。土の粘りときめ細かさが要求される技法で、代表的には、備前焼、信楽焼、伊賀焼、丹波焼などが有名です。

【粉引】

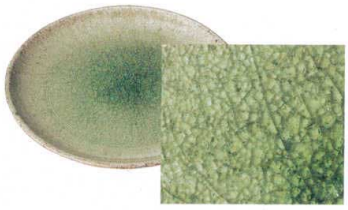
こひき　技法



褐色の素地に鉄分が少なく、きめ細かい白泥釉を、器ごとどっぷり化粧掛けをして素焼きし、さらに透明釉を掛けて焼いたものです。焼き上がりが粉を引いたり、粉を吹いたように白く柔らかく清らかで美しい釉面をしていることから粉引、または粉吹きとも呼ばれています。

【貫入】

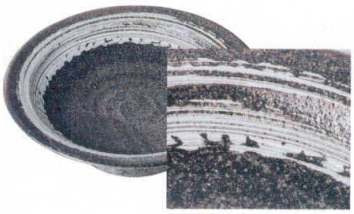
かんにゅう　技法



陶器の焼成時における陶土と釉薬の収縮率の差によって生じる表面の細かいひび状のものが入ります。焼成中に素地と釉薬が膨張し、それが冷える時に、陶土と釉薬の収縮度が違う為、貫入が入ります。

【刷毛目】

はけめ　技法



加飾法のひとつで、白泥釉を硬質の刷毛や藁筆などで器に一気に刷き塗ったものです。生地の地釉には青、赤、鼠色などがあり、化粧土がかすれたところから、生地の色が透ける様や、化粧土に現われた刷毛の跡が一種の模様となり見どころのひとつです。

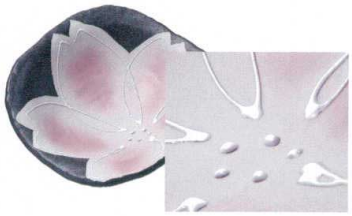
【三島手】

みしまで　技法

灰鼠色の生地に線を彫ったり、印花などのスタンプで文様をつけ、上から白化粧をし、はいて拭き取り、透明釉を掛けて焼き上げたものです。器の内外に施された点線模様が、静岡県の三島大社で作られる暦と似ていることから、この名がついたと言われています。

【一珍】

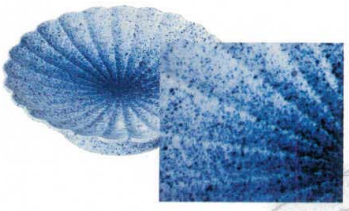
いっちん　技法



以前は、渋紙を円錐形に丸め、その先に金具を取り付けた道具に、濃いめの化粧土や釉薬を入れ、絵や線模様を絞り出しながら描く技法です。名前の「イッチン」は、染色の道具からきているようです。現在ではゴム製のスポイトに口金を付けたものが用いられています。

【吹墨】

ふきずみ　絵付け



染付けでよく用いられる下絵付けの技法です。呉須を霧吹き状に吹きかけることにより、線書きや濃みではできないグラデーションを表現することができます。生地に型紙をのせて、呉須を噴霧し吹き付けて、型紙を取ると文様が表現できます。

【赤絵】

あかえ　絵付け

釉薬を掛けて本焼きした白い器の釉面に、赤色を主に藍や緑、黄、茶、紫で上絵付けをし、さらに800度前後の低火度で焼き付ける方法です。とくに赤が主調になっているためこの名で呼ばれていますが、今日では、色絵と言われることもあります。

【祥瑞】

しょんずい　意匠

日本の茶人が中国の景徳鎮に発注して作らせた染付磁器です。染付けの中でも特に精巧な良質な品といわれています。緻密で美しく鮮やかな紗綾形や亀甲などの幾何学模様が代表的で、松竹梅の柄と組み合わせるものもあります。